

現代哲学における「自己責任」論の研究

はじめに

「自己責任」、この言葉はある事件を契機に日本で流行している。

この言葉は本来もっと昔のもっと古い世代の人々なら同じことをこの言葉は使わなかったであろう。

当時私は世捨て人で勉強が趣味だったがその対象は数学や自然科学、語学、倫理学、医学などで人文科学や社会科学などの勉強は避けていた。

人文科学や社会科学などは経済学や心理学などの一部を除いては公理主義、形式主義、論理主義的でないと考えていたからだ。

非公理的、非形式主義的、非論理的な対象の研究は非常に高度であるのと非常に応用的である。

私は基礎学問を勉強するのが趣味だった。

私は2年前にめまい症になるまで社会的な出来事を避け世俗出来な学問を勉強してこなかったが、それでも世間が騒いでいることはある程度耳に入ってくる。

その一つが「自己責任」事件であり、「自己責任」という言葉が変遷していく過程である。

自己責任について研究する。

第一章 「自己責任」事件の経緯

中東の政治情勢が不安定で戦争やテロなどで治安が不安定な時に中東への渡航を避ける様外務省が喚起したときにそれに反して中東に渡航した日本人たちがいた。

中東は政治的、治安的に不安定であり国民を守るため政府がその様な喚起を行うことがあったと記憶している。

何事もなかった人たちもいたであろうが現地で捕まり拘束されたり殺されてしまった人

もいる。

ある時に中東情勢が緊迫して危険な時期に政府の政府の渡航制限をするよう国民に勧告が行われたが、それを知りながら中東に渡航し捕まってしまった日本人がいた。

それに対し捕まった人たちの家族が貴社会計を開き「政府の責任である」と言ったことから「自己責任」問題が始まる。

中東に渡航されて捕まった人たちが生還したか殺害されたかは知らない。

この家族の発言に違和感を感じた人が多くいたようでこれは政府の勧告に反して本人たちが自分で危険地域に渡航した結果なので政府の責任ではなく本人たちの「自己責任」であるという意見が発生する。

事件の概要はこれでおしまいである。

これを外国のメディアが取り上げ、取り上げたメディアの国では人道的目的のためにボランティアで危険なところに行く人は称賛されるべき対象だと「政府の責任ではなく自己責任である」という意見を攻撃したということもあったがこれは議論の本筋ではないので後で軽く触れる。

第2章 現代哲学と責任の関係

責任という言葉は Wikipedia から引用してみよう。

「責任（せきにん、英: responsibility/liability）とは、元々は何かに対して応答すること、応答する状態を意味しており、ある人の行為が本人が自由に選べる状態であり、これから起きるであろうことあるいはすでに起きたことの原因が行為者にあると考えられる場合に、そのある人は、その行為自体や行為の結果に関して、法的な責任がある、または道徳的な責任がある、とされる。何か起きた時、それに対して応答、対処する義務の事」

と見出しで説明されている。

ウィキペディアでもあるしこの説明をうのみにする必要はないが誰が読んでもそれほど違和感のある説明ではなく常識的な見解と見てよさそうだ。

多分漢字や日本語の「責任」よりは英語の responsibility や liability の説明を何かから翻訳した感じだ。

「もう少し読み進めると日本における「責任」の様々な用法」という見出しがあり次のような説明がある。

「従来より、日本社会においては「責任」という概念・語がよく理解されておらず、本来の responsibility という意味とはかなり離れてしまって[要出典]、義務という語・概念と混同してしまったり、義務に違反した場合に罰を負う、という意味で誤用してしまう人も多い。あるいは、もっぱらリスクを負担することにのみ短絡させている場合もある（部分的には重なるが、同一ではない概念である）」

ここでは日本では「責任」という概念が混乱して使われているとある。

おそらく捕まったら後者の家族が政府の責任であると政府を攻撃したときに多くの人が違和感を感じたのであろう。

その違和感から「政府の責任」に反論するため「自己責任」という意見が出たわけだがこれにも多くの人が違和感を感じたようだ。

この説明ですっきり合点がいた人たちもいたかもしれないが多くの人は何か釈然としないまま現在に至っている。

事件以来現在に至るまこの言葉が使われるのは日本社会を批判するためであるのが殆どである。

「自己責任」を重視する社会はおかしい社会であるという考え方があることが分かる。

逆に社会を肯定する場合に「自己責任」が使われることはないようだ。

現状はある種の人々が「自己責任」の言葉を使って社会を攻撃するか、個人が起こした事件の結果を「自己責任」がぴったりくると感じた人たちが「自己責任」という言葉を使ってコメントするということが多いようである。

第3章 そもそも「責任」か？

現代哲学ではそもそもその核心部分において「責任」という概念がそもそも存在しない。

現代哲学では主体性、選択、世俗的なイデオロギーの優劣が存在しないこと、主体は世俗的イデオロギーを自由に選択しそれに従うことを前提に成立している。

それに加えて主体の選択をメタ認知し、自覚することを重視する。

この中には「責任」という概念はない。

また他者と言う要素も存在しない。

そもそも責任がないし、自分と他者と言う差異が存在しないので誰の、あるいは何の責任かという問い自体が発生しえないし、発生させても意味がない。

そういう意味では現代哲学のコアな部分は超個人主義的であり独我的であると言える。

他者や責任という概念を導入したければそれは世俗のイデオロギーを創造するかあるいは選択する段階においてである。

自分が想像する世俗のイデオロギーで他者や責任という概念を定義するか、選択する世俗のイデオロギーに他者や責任と言う概念が定義されている段階である。

世俗のイデオロギーは「責任」という概念を持つ場合も持たない場合もあるが「責任」という概念を使いたいのであれば世俗のイデオロギーで責任を定義する必要がある。

以上から「責任」という概念は現代哲学にとっては必須ではないことが分かる。

必須ではないが自らの思考や行動を常に自覚しメタ認知し続けているという点で現代哲学は知的、あるいは意志的な面で意識が高い思想と言える。

人間は感情の影響も受けるが感情により自覚やメタ認知を弱めたり失ったりしない精神的緊張感を要するからだ。

第4章 責任の定義

現代哲学と責任の関係を考えると、まずは現代哲学では「責任」の意味を定義しなければ

ならないことが分かる。

責任についてはウィキペディアを参考に定義を行ってみよう。

「結果の原因が行為者にあると考えられる場合に、その人は、その行為自体や行為の結果に関して、法的な責任がある、または道徳的な責任がある、とされ、時に罪や罰を課せられたり責められる状態。あるいは何かが起きた時、それに対して応答、対処する義務の事」

この様に定義した上で渡航し捕まった人と政府が責任を持つかについて考えてみよう。

まず渡航者が捕まったこと、あるいは殺されたことに家族は政府に責任があると言っている。

この責任とは法的責任だろうか？道徳的責任であろうか？

これは常識的に考えて政府は渡航の危険性を勧告し渡航しないように注意しているため政府に責任はないと考えられるであろう。

したがって政府は罪も罰も課せられないし、責められる理由がない。

また捕まった人を開放するために政府は努力しているのでこれに関しても政府に罪も罰も責められる岩絵もないであろう。

それでは捕まった人に法的、あるいは道徳的に責任があるのでしょうか？

別に渡航してはいけないという法律を破ったわけでもなく、世のため人のために中東に渡航し役に立とうとする行為には法律的にも道徳的にも称賛されこそすれ罪や罰を課せられたり責められるいわれはないであろう。

渡航についてそれを控えるべきだという政府の注意や勧告は禁止命令違反や違法行為ではなく従う義務はないのでこれも責任という視点でとらえるべき問題ではないであろう。

彼らが捕まり殺されたことについては完全に彼らの意志が介入する余地はなく犯人が彼らの自由を奪い強制的に行われた、捕まった人にとっては完全に受動的な出来事であり捕まった人に何かの責任があったとは言えない。

従って政府にも捕まった人にも責任があったとは言えない。

そもそも責任という言葉で政府や捕まった人やその行為を表現したこと自体が見当違いと言える。

この事件の場合責任という言葉で表岩されるのに最もふさわしいのは渡航者を拘束し、あるいは殺害した犯人である。

この犯人は我々の法律、道徳基準において責任があると言える。

であるから「政府の責任」論を主張した家族も、「自己責任」論を主張した人たちも「犯人の責任」論を唱えれば特に問題にはならなかったと思われる。

但しこれは当たり前過ぎて世論の注目をひきにくく、センセーショナリズムや利潤も追求せざるを得ないマスメディアも取り上げてくれなかったであろうと思われる。

少し議論がそれるが日本語の「責任」の言葉には「責める」という言葉が含まれるため罪や罰を課すというニュアンスが含まれる。

そもそも責任の語源である responsibility や liability は「結果を受け入れる」ということで必ずしもネガティブな意味とは限らない。

我々日本人や中東の現地政府には悪であっても反政府軍やイスラム原理主義者やテロリストにとっては捕まえて殺害した行為自体が法律的にも道徳的にも良い事だった可能性がある。

この場合彼らにとっては「良い責任を果たせた」肯定的な行為を達成し満足している可能性もある。

言葉は時や場所や使われる状況によって変化するというのも現代哲学の結論でもある。

第5章 自己責任論は何が問題か

前章まででそもそも「責任」の問題でないことを「責任」の問題であると間違えたことが問題であると結論した。

現代哲学という大げさな考え方を持ち出さなくても単に論理的に考えれば分かることなので、当初は誰かが「自己責任」論のおかしさを日本の言論空間に醸成された空気のおかしさを誰かが指摘してすんなり終わる問題であるべきはずのものがいまだに奇妙な言説がまかり通っている。

人道のために渡航し犠牲になった人々を称賛すればそれで終わっていた話なのだ。

当時の緊迫した状況、特にご家族の気持ちを考えれば仕方のない事なのかもしれないがそこには余裕や寛容さがなかった。

また知的な問題もある。

語彙や表現力、考え方が貧困であった。

後で気が付いて訂正すればいいのであるがそれもなされず現在に至っている。

これが以前からこうだったとか、以前より良くなってなおこれであれば救いがあるが、日本の言論界の知的な低下傾向を表すのであれば問題だ。

そして主体性や集団主義の問題がある。

そもそも何か習字たとき誰かが責任を取らなければいけないのか。

個人の主体的な自由な行動の結果に政府が責任を取らなければ政府も日本人も集団主義化し個人の自由と行動を制限する方向に進むだろう。

あの事件は他者や世界のための利他的行為の結果としての人間の美德を表す、美談として賛美され語り継がれていく可能性もあったはずだ。

それが自分で自分のケツを持ってない我儘勝手な子供っぽい行動の末のみんなにとっての迷惑な行動に零落してしまった。

ここには美しいものがない。

これでは後に続く利他的行動を志す人々がいなくなってしまう。

おわりに

「責任」これは日本人には重たい言葉であった。

責任を取るために辞職したり自決した時代もあった。

責任の重さが点灯したためか「これは私の責任です」と言えば倫理的には許される風潮があった時代もあった。

過去の経営者がやったことでも今の経営者が責任を取る、あるいは組織や部下の責任を個人がとることもあった。

「一億総無責任社会」という言葉があった。

責任の所在が分からない日本社会の組織のあり方に対する批判として使われた。

言葉は時代と共に意味が変わる。

であるから「自己責任」という言葉で何の問題もないのかもしれない。

他方でこの場合の「責任」に当たる言葉として「運命」「宿命」「実存」などが使われた時代もあった。

与えられた状況は受け入れるしかない場合もある。

しかたがない場合もある。

昔の方がいまより社会に不条理、理不尽は満ちていたであろう。

人間は弱い存在でもあって何もかも主体として受け入れることができない場合もあるのだ。

京都で五山の送り火を「大文字焼き」と習字させる新聞社を見て古い京都人は文化や伝統が失われるとはこういうことなのだなどと古い京都人は感じた。

我々は思い出さないといけないのだろう。(字数：5,303 字)